

## 地域の歴史⑤ 現代

第2次世界大戦後の復興と高度経済成長のはじまりとともに、1952年（昭和27年）頃には地場産業である「結城紬」が好景気を迎え、翌年の1953年（昭和28年）には、栃木県立結城紬指導所（現在の県紬織物技術支援センターの前身）が設置されました。



現在の紬織物技術支援センター正面と南側から

昭和20年代後半、全国的に町村合併が進む中、絹村では古くから生活圏として結びつきの深い茨城県結城市との合併問題も起こりましたが、1956年（昭和31年）9月には桑村と合併し桑絹村となり、役場は羽川の桑村役場に移り、1961年（昭和36年）に町制施行され桑絹町となり、1965年（昭和40年）9月に小山市に合併しました。

かつて学区内には「中島入口」「中福良」「高橋」「新川」などのバス停がありましたがマイカーの普及に伴い、昭和から平成に入る頃には公共交通機関であった2系統の路線バス（関東バス「小山駅～福良線」、東武バス「結城駅～吉田～上三川線」）も廃止されました。

また、1973年（昭和48年）には、上流に田川の洪水を鬼怒川に逃がす放水路が完成したため学区内の水害もなくなりました。

絹地区では、これまで火災や救急の際には、大谷や桑分署の消防車や救急車を要請していましたが、2016年（平成28年）4月に待望の小山消防署絹分遣所が開設されたことにより、到着時間が大幅に短縮され、地域住民のくらしの安全に大きく役立っています。



田川放水路（舟戸大橋）



現在の小山市役所絹出張所・公民館



小山消防署絹分遣所

昭和40年代から土地改良や耕地整理が進み、碁盤目状に田畑が区画され、道路も拡幅や舗装化が進みました。平成に入ると、米の生産調整により、大豆やネギ、いちごなどの栽培もはじまりました。また、地場産業である「結城紬」の衰退により、地元から養蚕農家がなくなり、紬織物に従事する人も減少しています。

